

## 目的・手法の異なる三つの夏のワークショップ

夏期休暇中でも多くの参加者 — 学生相談室 —

学生相談室では、より良い人間関係を築き、「良質な人付き合い」を体験してもらおうと夏期休暇中にワークショップを実施している。今年も、目的と手法の異なる三つのワークショップが行われ、例年以上の参加者があった。

【コミュニケーションの仕方を学ぶ—対人関係理解のためのワークショップ—(参加者19人)8月2・3日、生田キャンパス】

【より良き自己表現を学ぶ—アサーション・トレーニング(同19人)9月2・3日、生田キャンパス】

【エンカウンター・グループ・人間関係理解プログラム(同9人)9月4～6日2泊3日、軽井沢セミナーハウス】

☆☆☆☆☆

「それでいいんだよ」と認められたうれしさ

アサーション・トレーニングに参加した大石淳くん(経済)は「自己表現が苦手と感じていたのと、夏期休暇中に何かにチャレンジしたくて参加しました。自分の考えに自信がなくても人に話すことで「それでいいんだよ」と認めてもらえたうれしさ。人との関わりの中で言いたいことを溜め込む傾向がありましたが、はっきり言った方が、自分にとっても相手にとってプラスだということも分かりました。ふだん話すチャンスのない、さまざまな学部・学年の人と出会ったことも新鮮な経験でした。

☆☆☆☆☆

金子玲子カウンセラーにワークショップの効果について聞いた。

「コミュニケーション」を苦手とする人が増えてきている中、学生相談室のワークショップは、一人ひとりの個性を尊重しながら、さまざまな手法で人間関係を円滑に進めるヒントを得てもらおうと企画しています。自分自身を見つめる機会にもなります。認知度が上がってきたようで参加者は増えています。リピーターも多いですし、複数のワークショップに参加する学生もいますし、男子学生が増えてきたのも特徴です。

最初は戸惑っている学生も理論と実習を繰り返すうちに、「さまざまな価値観」を認め合い、その上でコミュニケーションを作っていくことを学びます。事後アンケートで、「もっと目立つところに広報を」「複数回実施してほしい」といった意見をいただきました。皆さんのニーズにあった、より良い形のワークショップを展開していきたいと思っています。

【ニュース専修2004年10月号3面】

## 自己チューの壁の中で「考える力」を捨てた日本人

### 経済危機以上の深刻な問題を問う

ドイツで25年間生活し、海外から見た日本の特殊性を分析、日本人のあるべき姿を提言し続けている仲井斌法学部教授(国際政治史)の著書「自己チューの壁の中で『考える力』を捨てた日本人」(三笠書房・本体1400円+税)が話題になっている。

#### ー執筆のきっかけは？

「11年前に帰国して以来、日本人が刻々と変わっている現状に愕然としました。『公共空間』が『私的空間』化し、『わたし』という自己が我がもの顔に振る舞っています。我慢を知らない『自己チュー族』が増えている現実に衝撃を受け『日本人の精神劣化論』として社会に警鐘を鳴らしたいと考えたのです」

#### ーなぜ「自己チュー族」が増えたのでしょうか？

「何でも与えられる便利な社会では、『考える』必要性がなくなりました。自分の欲求だけに従って行動するうちに、他者への配慮が薄れていったと考えられます。若者だけでなく、いい大人までもが義務と責任を果たさない社会は、経済危機以上に深刻です」

#### ー日本人が考えなくなった原因は？

「『受動態』のメディアが周囲に溢れていますから、本を読まなくなってしまった。暗記型学習に慣れて、家庭でも学校でも発言する機会が減ったことも原因でしょう」

#### ー「精神的劣化」の危機を乗り越えるには？

「社会的倫理観の育成のため家庭、学校、社会が一体となり、『ものを考える人』を育てるという意識を改めて持つ必要があります。幼児期から、社会のルールを教えるというシステムを早急に構築しなければ、この国の将来は大変なことになってしまいうでしょう」

【ニュース専修2004年10月号3面】

## 学部発信 ー経営学部ー

### 企業による提携講座で能動的な学習態度を身につける

#### パワーポイントを使ったグループ学習

本年度の「会計学特殊講義—日本内部監査協会提供講座—」においては、各界で活躍されている7人の公認内部監査人の講師の方々、内部監査に関するホットなテーマを熱心かつ丁寧に講義して下さいました。詳細は、本年度の『経営学部専門科目講義要項』の102頁を参照して下さい。授業の充実度を数量的に表すことは困難ですが、前期12回の授業において受講生各自に配布された資料が353枚、レポート6回という数字をみただけでも、この授業が他の授業とは一味違うものであることは分かってもらえると思います。

実際、受講生の中には、レポートの厳しさに、ついつい「ぼやく」学生もいました。しかしながら、レポートの返却が進み、内容に応じた厳正な評価が行われており、ダメな場合にもどこがダメなのかを指摘する丁寧なコメントが添えられていることが分かると、学生達の受講態度が徐々に変化していきました。その変化を実感できたのは、最後に行われたケース・スタディの授業でした。101人の受講者は機械的に8班に分けられ、1週間後にはパワー・ポイントを使った報告が求められたのです。正直に言って、班の中には報告できないところも出てくるのではないかと心配しましたが、予想は完全に外れました。班と言っても、この授業で初めて知り合った者がほとんどであり、学年も違うのに受講生達は授業後も連絡を取り合い、資料を真剣に検討し、すべての班が短いながらも立派なプレゼンテーションを行うことができたのです。

#### 3年前からカリキュラム化

企業による提供講座は平成14年度から、企業人との連携による「理論と実践の融合」を目指した経営実践カリキュラムとして開設されました。具体的には、日本内部監査協会の他にも野村證券、日本ユニシス、パソナ、新日本監査法人、日本フードサービス協会などのご協力を得て、産業界の最前線で活躍されている方々に直接講義していただく「特殊講義」という形での授業が展開されてきました。平成15年度からは、本講座に対して、文部科学省から「私立大学教育研究高度化推進特別補助」をいただき、授業で使用するプロジェクタ等の機材の購入や授業補助員のアルバイト代の支払等に使用させていただいています。

研究者教員による座学がほとんどである経営学部のカリキュラムの中にあって、企業による提供講座は実務の世界を肌で感じる数少ない授業であり、また「一方的な授業をただ聞く」という「受動的」な学習態度を改める絶好の機会でもあります。他学部の方も受講できますので、来年の履修登録の際にはぜひ、オリエンテーション授業を聞きに来て下さい。なお、各回の最優秀レポートは、日本内部監査協会のホームページに掲載される予定です。あわせて参考にして下さい。

(山崎秀彦)

【ニュース専修2004年10月号3面】